近松の文学　―『世継曽我』と『曽根崎心中』を中心に―

文学部　　平　田　澄　子

今年は、徳川家康が慶長八年（1603)、江戸に幕府を開いて400年経ったというわけですが、歌舞伎も始まって400年ということで、歌舞伎座では一月から毎月歌舞伎四百年を歌った興行をしております。歌舞伎の起源を伝える資料の中に、歌舞伎踊りの創始者と伝えられる出雲の阿国が、丁度江戸幕府の開かれた年に、京都でこの歌舞伎踊りを演じたという記録があるため、そこから起算して400年ということで、歌舞伎400年は、少々曖昧な400年ではあるのですが。

それよりも今年は今日お話させていただく近松の生誕350年という記念の年でもありまして、こちらは幕府の開始と同じくはっきりしているのです。この記念的な年に近松の作品についてお話をさせていただくことができ、大変嬉しく存じます。

近松は、1653年越前、今の福井県に武家の次男として生まれたと言われてます。父親が浪人となりまして、一家で京都に出てきます。この時期の近松については、ほとんど分かっておりませんが、武家の出であれば、幼少時に漢学の素養などはある程度身につけていた筈です。京都に出てからは、公家や寺奉公などを通じ、古典、仏典、また当時はやりの俳諧などを学んだと思われます。そしてついに、演劇の世界に入り、浄瑠璃（現在文楽と言っている、人形劇ですが）や歌舞伎の作者として身を立てるようになります。

近松の作品：デビュー作品とされていますのは、『世継曽我』、31歳の時です。その後72歳で亡くなるまでに、120作余の浄瑠璃と10作余の歌舞伎作品を書いております。元禄16年には『曽根崎心中』を書き、大ヒットさせました。現在でも、近松と言えば、まずこの『曽根崎心中』が連想されるほど人気のある作品です。大阪で実際にあった、男は商家の手代、女は遊女という、恵まれない市井の男女の心中事件を劇化したものですが、このような庶民が主人公の作品を世話浄瑠璃、『世継曽我』のような作品を、これは鎌倉時代の頼朝の家来達の中に起きた敵討ちの話です。時代浄瑠璃などと呼んで区別しています。世話浄瑠璃は朝の連続テレビ小説、時代浄瑠璃は日曜夜８時の大河ドラマというところです。

『曽根崎心中』の成功以後、『冥途の飛脚』『大経師昔暦』『心中天の網島』『心中宵庚申』など24作の世話浄瑠璃が書かれ、映画や舞台劇にもなってよく知られてお

ります。近松は、「愛の詩人」などと呼ばれていますが、それは、このような世話浄瑠璃が恋に命を懸ける男女の悲劇的な人生を感動的に描いているからでしょう。しかし作品の数からも、また当時の上演事情からも、近松の作者としての評価は、時代浄瑠璃を抜きに考えることはできないと思います。

ですが、100篇ほどの時代浄瑠璃のうち、『国性爺合戦』『平家女護島』ほか2・3の作品以外は現在ほとんど舞台で見ることができないのは、時代の流れとはいえ、本当に残念です。

『世継曽我』について：時代浄瑠璃の第一作『世継曽我』と、世話浄瑠璃第一作『曽根崎心中』を読み比べながら、近松の世界のエッセンスといったようなところを味わっていきたいと思います。『世継曽我』は中世の『曽我物語』という作品をもとにしています。兄弟が力を合わせ、子供の頃から機会を狙って、ついに親の敵を討つ話です。兄の十郎は返り討ちに会い、弟の五郎は頼朝に罰せられ、二人とも若い命を散らすのです。十郎は、虎という大磯の宿の遊女が恋人でした。虎は恋人亡きあと、尼となって兄弟を弔い、またこの話を語り伝えたと言われております。敵討ちのあった夜が旧暦5月28日で、雨模様でした。それで、この頃の雨を、「虎の涙雨」と言うことがあります。兄弟は母の再婚先の曽我に住み、大磯や鎌倉を往復していたわけです。勿論茅ヶ崎も通ったことでしょう。『曽我物語』には、敵討ちに出発する前の十郎と虎のつらい別れがしみじみと語られています。

近松はこの長編物語を、浄瑠璃化するに当たり、まず、敵討ちの事後処理、即ち頼朝の面前で五郎が裁かれるところから始めました。（全体の粗筋は資料Aに）十郎と虎の間には男子がおり、最後に頼朝から親代々の土地を与えられ、家を継ぐと言う、原作とは異なる結末です。武家出身の近松であったからこそ、家の存続というような結末のストーリーを考えたのかも知れません。また、近松は弟の五郎にも少将という遊女を恋人として登場させました。これも原作にない設定で、以後の曽我物作品に継承されて行きます。

さて、殺された敵の家来二人が、彼女達に言い寄ります。その時の彼女達の誇り高いせりふを、資料Bの傍線部でご確認ください。立派な馬も鞍もない貧しい人がいとしく思われ、大名はきらいと言って二人の侍を振り通すのです。遊女二人の心意気は当時の観客にも好感を持って迎えられたことでしょう。愛の深さ、潔さ、強さ、近松の描き出す女性達のルーツがすでにここにあります。実は『曽根崎心中』のヒロインお初もそういう女性の一人であり、すでに指摘されていることですが、『世継曽我』の場面設定とよく似た場面が『曽根崎心中』にも作られているのです。

そこで、お初が虎や少将と同じように啖呵をきります。(資料D)

『曽根崎心中』について：この作品はお馴染みと存じますので、ストーリーの方は省略し、文楽のビデオ・テープで、天満屋の場面をご覧いただきます。店の縁にお初が越し掛け、縁の下に恋人の徳兵衛を入れて、打掛の裾で男を隠し、敵役の九平次が金（徳兵衛から騙し取った）をひけらかし口説くのを、「わしとねんごろさあんすとこなたも殺すが合点か」と言いきって、縁の下の男に足で合図を送り心中の約束をする、有名な場面です。(資料C)

文楽の女の人形には通常足は付いてないのですが、この場面のお初には特注の足が付いています。お金が何より物を言う、遊里の女性でありながら、愛を貫いて男と運命を共にするお初は、いきいきと魅力的に、自分の人生を生き抜くのです。それでも当時の社会では境遇のみじめさ、運命の過酷さを刎ね返せない、そこにあわれがありました。実際の心中事件の真相は不明ですが、近松は浄瑠璃に取材すると決めた時に、その女性像は決まっていたのではないでしょうか。『世継曽我』から『曽根崎心中』までの間に近松が書いた浄瑠璃は、すべて時代浄瑠璃ですから、登場人物は、基本的に天皇、貴族、大名、武士などが中心になりますが、そこに廓の場面があり、近世的な遊女が登場することもあります。

彼女達の性格は、近松のこれも武士魂によって作り出された虎やお初と共通する、一本筋の通った女性像であるように思われます。

近松は浄瑠璃を、演じて面白く、読んで楽しいものをと心がけて書いたのでした。作品の多さに比べ、近松自身のことが分かる資料は余りにも少ないのが、本当に残念ですが、辞世の文に、「一生をしゃべりちらした」とあるように、彼の人生や心はみな作品の中に書き込まれているのではないかと思います。そう思って作品に接すると、またいろいろ面白い読み方ができるかもしれません。